

トピックス

1. 播州日誌「らんまん」の人生

2. ショートストーリー「妖怪の夢」



福留経営労務管理事務所
姫路龍馬会
社会保険労務士・行政書士
福留章

龍馬通信

No. 67

2023年 7月号

小暑～大暑の候

夏の思い出

夏の宵 線香花火 揺れて
浴衣の君は ほんのり頬を染めて
ポタリ ポタリと 火の玉落ちて
最後の一つが 落ちて 砕けた時
「寂しいね・・・」と言って 顔を伏せた

暗闇に 淡く点滅する 黄色の光
閃光を追って うちわを振る 君
ほら 捕まえたよと
両手を合わせて 指を少し広げて
私の顔に近づける
ちいさな掌の中の 蛍
近づけた顔と顔が 触れそうになっても
君は蛍に 夢中

天神様の夏休み 恭しく頭を下げて
二人でくぐった 大鳥居
夏の模様の ワンピース
金魚すくいの 君
背中ボタンが外れて あやしい風が吹く
「背中ボタンが・・・」
「あぁ イヤ 恥ずかしい」「早く とめて」
震える手で ぎこちなく
肌に触れたことは 言わないでおいた
いい香りの君のにおいが
アセチレンガスの 匂いに溶けて

高校時代 二人だけの 夏の思い出



いつの日からか
私は夏の海とは無縁になった
海水浴など 後の始末を考えると
すでに 億劫（おっくう）になる

むかしから「瑞穂の国」と言われ
水資源に恵まれた 日本
豊かな水源が織りなす 様々な水の風景は
瑞々しい文化を生み
しとやかな国民性を育ててきた

人生にも季節がある
青春 朱夏 白秋 玄冬
私の人生の季節は 白秋を過ぎて 玄冬
鮮やかな色彩は消え
すべてのものが モノトーンに見える
愛も 欲も 夢も 希望も

キラキラと輝いていた海も
打ち寄せる 波の白さも
もう 二度と戻らない
あの 夏の日の思い出



播州日誌

「らんまん」の人生

彼は植物と対話できたという。牧野富太郎の逸話にはうなずかざるを得ない。半端でない植物に対する造詣と愛情は、彼の一生を貫く「芯(しん)」のようなもので、他の追従を許さない。植物の「申し子」とも称される。植物のことなら何でも知りたい、見たい、聞きたい、触りたい、人に教えたい、見せたい、話したい。植物三昧の彼の毎日は、他から見ればやはり「変人」としか理解されなかったであろう。一部の近親者と同じ研究者を除いては。

それを一生貫いたのだから、それはもう「変人」の域を超えて「偉人」の域に達している。

全国を歩いて植物採集し、植物を学術的に記録し、日本の植物分類学の基礎を開いた人というよりは「草分け」と呼ぶべきか。一生のうちに1500種類以上の新種や新品種を発見して、自ら名前を付けた。兵庫県の県花である「ノジギク」も彼の命名と聞いて、その幅広い活躍に脱帽した。先日神戸新聞に掲載されていた、内海功一氏(植物、昆虫学者)との手紙での交流には感動した。内海氏からの鑑定依頼に快く応じている。また自分が前に指摘した植物名が誤っていたことを詫言っている。その真摯さには、驚くほかない。結局、後の研究で誤りではなく、同一の植物であった事も判明している。

彼の一生は、全身全霊をかけて植物(草花)の道を、日本中にそして世界中に広めたことだ。昭和15年(1940)「牧野日本植物大図鑑」を刊行。彼の功績の集大成であり、今でも研究者たちのバイブルになっている。江戸末期末文久2年(1862)に生まれ昭和32年(1957)94歳で亡くなっている。彼の人生は、植物に

くれ、植物にあける毎日の連続であったと思われる。

「らんまん」の草花に囲まれた人生。植物の「申し子」として生まれた彼は、その力を十分に発揮して功績を残して、この世を去った。

まさに「らんまん」の人生であった。

2023. 6. 28



～南国土佐を後にして～

第12回 「高知編」

親父の涙

4月の入学式までの1か月余りをどう過ごしたのか記憶がない。とにかくふわふわだらだらと過ごしたような気がする。TYさんとは、これが最後だねと言いながら3~4回はデートしたと思う。浮気する、しないでけんかになったこともあった。

はっきり記憶しているのは、上京前日のことである。上京といっても日大では1年間予科として、静岡県三島市の分校で講義を受けることになっていた。日が詰まってくると流石に私も一人生活の期待と不安に胸が押しつぶされそうだった。切符の手配(国鉄)は姉さんが骨を折ってくれた。とりあえずの布団一式は、帯屋町で新調してもらい、客車便(チッキ)で送ることになった。両親は金の工面で四苦八苦のようだったが、私は友人と別れを惜しんで集まって話をしたりしていた。夕方になって改めて親父に呼ばれた。居間に入るといつもとは違う

たたすまいの父がいた。何時もの胡坐ではなくきちんと正座している。前に座るように言われて正座して対面する。

突然、親父が言葉を詰まらせながら「あきら 東京へ行くかよ・・・」そこまで言って嗚咽した。いつもとは違う親父に緊張する私。「すまんこればあしか用意できなかった・・・」

「あとはまた送るきにゃ・・・」と言って泣きながらお金を私に握らせた。一万数千円。さぞ苦労をしたのだろう、しわくちゃのお札。私の目からも涙があふれてお札を濡らした。シワだらけのお金が私の両手の中で震えていた。

下宿代は食事込みで5000円位だったので1か月ぐらいなんとかなるだろう金額だった。

「頑張ってな、立派な大学生になってくれ。げんきでな・・・」絞り出すように言う親父に「ありがとう がんばるから・・・」

親父の涙を初めて見た。驚きよりも親父が小さく見えた。これから後、あれほどの涙を見た記憶はない。

興奮して眠れぬ夜だった。暗闇の中で父母や兄弟姉妹にむかって「ただ頑張るのみ」と繰り返し念じていた。

「南国土佐を後にして」 18歳 旅立ちの日



第3回 社労士 野口 亮 がゆく

年に数回であるが、解雇の事例がある。理由はさまざまであるが人一人の人生そのものにかかわる事だけに気が重い。数日前からいくつかの選択肢を考えてみる。一方的に労使双方が不利にならないように。

会議室で社長、私、従業員と奥さんが向かい合う。重い空気が部屋中によどんでいる。事務員がお茶を運んできたのをシオに話を始める。最近の病状からヒヤリングを始める。薬が効いているうちはいいが、切れてくると手が震え呼吸が乱れ歩行が困難になるという。仕事が気になって眠れないこともあるという。当時（15年ほど前）パーキンソン病は不治の病でありだんだん悪い方向に進む不可逆性の病気。治療法特効薬もない。本人の意思は会社を辞めたくない。しかし会社に迷惑はかけたくない。奥さんも同様であるが成人しているとはいえ子供一人と3人家族、生活面での不安を訴えていた。社長も解雇を言いかねて、ただ客からのクレームが少なからずあると小さな声で訴えていた。

長い沈黙の後、野口は次のように意見を述べた。どちらにしても仕事を続けることによって、病勢が悪化することは避けなければならない。療養が第一であり思い切って退職する。

会社的にも印刷物の損害の賠償は多額になる事があり仕事を任せるわけにはいかないという意見。野口が続ける。今現在部分的に活用している「傷病手当金」を全面的に活用し労務不能の証明をとって傷病手当金を全額受けること。傷病手当金を受給する権利は初診日（当時）から1年6か月であること。退職によってもその受給権は消滅しない事。併せて厚生年金の障害年金を申請して、障害等級2級（当時）の支給を受ける。その他生活費の不足については、奥さんがたとえ半日でもパート勤務して生活を支える。ことなど提案した。会社は15年勤続の功績に答えて退職金の増額と、1か月分の和解金を支給することになった。



きよんととしていたがいくつかの質問に答えるうちに、みんなの顔に安どの笑みが浮かんだ。労使協調があり、理解しあうことのできる人たちであったことが幸いして円満な解決に至った。後日おおよそ提案どおりに事が運んだ。もちろん手続き関係は事務所が担当した。

帰途、胸の奥に苦いものを感じながらも、少なからぬ達成感を感じていた。夕暮れの街に夕日が彩を添えていた。

創作 ショートストーリー 妖怪の夢

土佐の妖怪しば天狗。人呼んでしば天。大体妖怪が活躍するのは夜というのが相場。

昼間はいつものように、沼や池の水辺でのりくらりと甲羅干しをしたり昼寝をしたり。そんなしば天にも夢がありました。世の中の人々の役に立つことをして、そのうち水天宮の神様にお願いして、人間にしてもらおうこと。実は人間になりとうて、なりとうて、気が狂わんばかりの夜を過ごしたこともあったという。

ある日のこと、とおりがかった二人の農夫からうわさ話を聞いた。妖怪の耳は地獄耳、小さなつぶやきも聞き取ることができきる。

「鬼の徳兵衛の話 知っちゅうかね」「あの高利貸しの徳兵衛のことかよ」

「まあひどい話ぞね」「借金返さんからゆうて病人の布団まで巻き上げてもっていくそうな」「一度金を借りたが最後、雪だるま式に利息がかさんでとんでもない金額に」

「かというて、病人の布団までとはのう」「そうじゃ、隣近所でも娘を売り飛ばすと言って大騒ぎ」「まっこと困ったもんじゃのう。」

話を聞いたしば天。これは俺の出番と、手ぐすね引いて待つことしばし。夏の夜更け通りかった徳兵衛の前に、躍り出たしば天。「徳のかけらもないのに 徳兵衛とはお前か」

「徳兵衛すもうとろ、取ろうちや」

「おんしゃなんなら」

「おら しば天よ」

「おらが負けたら、大判小判、取り放題ぜよ」

「なに、大判小判・・・」

「それに女も酒もつけるきにゃ」

「よっしゃわかった、かかってこいや」

はっけよい残った、残った。何しろ河童のしば天、身体がぬるぬるして、掴みどころがない。

一刻 二刻 悪戦苦闘の徳兵衛、後ろへ廻って、甲羅を抑えた。ここが負け時と見て取ったしば天。大げさに声を上げた。

「参った、参った。甲羅をつかまれたら、わしゃ弱いんよ」

「そうか参ったか。約束ぜよ、大判小判、酒、女。こりゃ極楽極楽」

「ちくとまっとうせ、今仕度するき」

石の上に大あぐらの徳兵衛、大判小判を山と積まれて上機嫌。金はばらまく、酒は大杯で飲みほす、女と戯れてあっちへ行ったり、こっちへ来たり。酒池肉林、百花繚乱、浅ましさをさらけ出しての大宴会。

夜が白々と明けて、通りがかりの百姓二人。

「あら、鬼の徳兵衛、ふんどし一丁でなにしゅうがよ」「木の葉を投げたり掴んだり、石にかじりついたり抱き着いたり。」流石しば天。大判小判は木の葉、酒は沼の溜水、女は幻（まぼろし）。

一人宴会がたたって、医者通いになってしまったと、頭と体がおかしゅうなってしまうと。高利貸しから足を洗い、これまでの借金も、口八にしたとか。しば天のおかげじゃ言うてみんな喜んだがよ。「よかった、よかった。」「まっことよかった。」

